今昔徒然顛末記

迦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今昔徒然顛末記

【Ｎコード】
Ｎ７９０１Ｂ

【作者名】
迦月

【あらすじ】
『終わり』を見届ける為に生きる占術士。その先に待つものは存亡か、滅亡か……◆顛末記・第一章◆

帰郷

すっかり変わってしまった故郷の町並みとそこを行き交う人達を見て、迦月(かげつ)はため息を一つつく。

「時代や街が変わろうとも人は変わらない、か…」

遠い昔、あの人がそう言っていたのを思い出す。

美しく華やかな庭園。そこを流れる小川に架かった小さな橋の上で、あの人が寂しそうに微笑みながら言ったこと。

あれから千年以上経った今でも、鮮明に覚えている。

それが、私が見た彼の最後の姿。

その後、彼は……

「あーもう、止め止め。埒が明かないや」

迦月は一人苦笑して、もう一度ため息をついた。

「とりあえず墓参りにでも行くかな」

少ない荷物の入ったバッグを肩に掛け直し、歩き出した。今は亡き友が眠る寺へ。

墓参り

途中、立ち寄った花屋でいくつか見繕ってきた花を持って歩いて行くと、ほどなくして、目的の寺の大屋根が見えてきた。
迦月が歩くこの寺へ続く道は、昔からほとんどその姿を変えることなく佇む古い民家が立ち並んでいる。
その中でも、あの寺はとくに古い。もしかすると聖徳太子の建てた法隆寺の次に古い木造寺院かもしれない。

「そういえば、弘寛は元気にしてるかな」

そう呟いた迦月が前に目を向けると、瑠璃色の羽を持った蝶が迦月の数歩前を飛んでいた。
手を前に掲げると、その蝶は警戒することなく迦月の指に留まった。

「久しぶりだね、伽羅。わざわざ迎えに来てくれて有難う」

蝶が迦月の指を離れて、先程と同じように数歩前をふわりと飛ぶのを見ながら、迦月は寺の正門をくぐった。

蝶に案内されるままに、本殿の脇にある事務所のような建物に迦月が入ると、中は大量の本と何かの資料らしき紙がいたる所に散らばっている光景が目に飛び込んできた。
またか…と、迦月が窓際を見ると、案の定ヤツがソファの上で寝ているのを見つける。

毎度のことながら、よくこんな所で寝れるなと半ば感心と呆れが混じったため息をついて、迦月はその人物を起こそうと一歩踏み出したとき…。

『どいて、迦月ちゃん！』

「！？」

いきなり呼ばれて後ろを振り向くと、開けたままの戸の外側から袖なしで瑠璃色の着物のような服を着た少女が、自分の身長よりもはるかに長い棒を構えて、こちらに向かって走り込んで来たのが目の端に入った。

「のわっ！」

間一髪のところで避けた迦月が、足元の本につまづいて転んだのも気にすることなく、少女は跳び上がり、ソファで寝ている人物に向けて勢いよく棒を突き出す。

――ボスッ

『！？』

「ふっ。まだまだ甘いな、伽羅」

そう言って、迦月の右側へトンッと涼しげな顔で着地したのは、たった今少女にやられたとはずの人物――弘寛だ。

『くそっ、次こそは絶対に仕留めてやる！』

「そのセリフも聞き飽きたがな」

『弘寛ムカつく！』

腕を組みながら呆れたように言う弘寛に向かって、伽羅が腹立たしげに言った。

「事実だろうが」

『さっきの事といい…この場でのめしてやる！！』

「ほお？やれるもんならやってみろ、このどチビ」

「〜っ！あったまきた！！くたばれバカ弘寛！」

伽羅が棒を構え直し、弘寛に殴りかかる。弘寛も呪符を取り出し、応戦する構えを見せる。

「…急急徐律令」

『させるかっ！』

「ストーーップ！！」

いきなり掛けられた声に驚いた二人は、そのままの体勢で迦月に目を向ける。

立ち上がり、手で服についた埃を払うと、迦月は呆れた顔で二人を見据えた。

「まったく、人が久々に来たってのに…ケンカするなら後にしてくれ」

『あ、ごめん迦月ちゃん』

そう謝る伽羅とは逆に

「なんだ、いたのか」と頭をボリボリ掻きながら大欠伸をする弘寛にムカつきながらも、迦月は落ち着きを払って笑いかける。

「弘寛も伽羅も相変わらず元気だね」

「けっ！むしろこのチビが元気すぎて困ってるよ」

『よく言うよ！おやつに取っておいたあたしの苺大福食べたくせに！！』

い、苺大福？…それでいつもより伽羅の機嫌が悪かったのか。

「あ？あれお前のだったの？どこにも名前なかったがなぁ」

ニヤリと笑って、からかうように首を傾げる弘寛。

『大福に名前掻くヤツなんてどこにいるのよ！！』

睨みあう二人の間で火花が飛び交う。

「やるか？」

『やってやろうじゃない！』

再びお互いに距離をとり、伽羅は棒、弘寛は袖に隠した暗器を構え

直す。

こりゃ、どっちも本気だな…。

呆れ果てた迦月は、今日何度目になるかわからないため息をついた。

『…っらぁ！』

「んなもん当たるかっての！」

またしても暴れ始めた二人を横目に、迦月は目を閉じてある言葉を紡いだ。

「《我を見守り、守護するものよ。我の呼びかけに応え、その姿をここに現わさん。彼の名は伐孤》！」

すると迦月の前に銀のつむじ風が起こり、周りの紙や本を飛ばしていく。

その勢いが薄れて消えてしまうと、その場所には銀髪で襟足が長く、薄紫の狩衣を着た一人の男が立っていた。

「いつもなら寝てる時間なのに、呼び出してごめんね伐孤」

『…用件はなんだ？』

すまなそうに言う迦月を眠たそうな目で見て、伐孤と呼ばれたその男は不機嫌そうに答えた。

「悪いんだけど、あそこの二人を止めてくれないかな？このままだと、本堂まで壊しそうな勢いだからさ」

伐孤は、先程よりも激しくなってきた二人の様子を見ると、欠伸を

して迦月に向きなおった。

『ほっとけ。あれはすぐに終わる』

「そう？じゃあ、いいか。さて…」

『とこか行くのか？』

伐孤が聞くと、迦月は少し微笑んで言った。

「伐孤も来なよ。たまにはいいんじゃない？」

そう言うと、迦月は転んだときに落とした花束を拾い上げ、本気モード全開で激しい攻防を繰り広げる二人を残し、伐孤と外へ出た。

寺の脇にある墓地の一番奥に迦月と伐孤はいた。

二人の前には大小の墓石が五つ並んでいる。

迦月はその墓の前に新しい水を入れた瓶に花を添えて、静かに手を合わせた。

そこには彼等の身体も魂もなく、すでに生まれ変わっていることも知っている。それでも、こうして手を合わせるのは、己がまだ人であるということの証だと思えるからだった。

立ち上がり、墓石を見つめる迦月の背中に伐孤が声をかけた。

『迦月…』

「ここに来るの、久しぶりだね」

そう言って振り返った迦月は伐孤優しく笑いかけた。

「前に来たときは、まだここに藤乃さんがいたのにね。さすがに逝っちゃったか」伐孤を見た迦月は、彼が意味ありげに笑っているのが目に入った。

「？何かした…」

《ちょっと！！誰が何処に逝ったって！？》

「！？」

突然、頭上から怒鳴り声が聞こえて、迦月は驚いて上を見る。

見上げた瞬間に迦月の顔面を、何かが踏み付けた。

「ぶっ…！？ふ、藤乃さん！？」

ひらりと迦月と伐孤の前に飛び降りたのは、背が高く、勝ち気そうな顔に悪戯っぽく笑みを浮かべた、白い拳法着の女性。

《で？何処に逝くって、迦月？》

「いや…その、ごめんなさい」

迦月が謝ると、藤乃は《冗談だよ》と笑った。

《にしても、久しぶりよね。元気にしてた？》

「はい。このとおりピンピンしてますよ。伐孤もね」

《伐孤？》

わざとらしく言う藤乃に、面倒臭そうに目を向ける伐孤。

『……ふん』

《あら、伐孤いたの？気付かなかったわ》

『アンタも相変わらずバカそうでなによりだ』

《フフフフフ…》

『フフフフフフ…』

笑顔で言い合う二人の周りに、ドス黒いオーラが漂いはじめる。
いつものことなのだが、雰囲気が危うくなってきたのを感じ取って、
迦月が話題を反らす。

「そういえば、藤乃さんさっきどこ行ってたんですか？」

ん？と藤乃が迦月を見る。

《ちょっと散歩にね。明弥と宵瀬と一緒に行ってきたんだよ》

ね？と言った藤乃の視線の先には、二羽の烏が離れたところにある
墓石の上にとまっていた。

「明弥と宵瀬？あそこの烏のこと？」

《あ、そっか。まだ紹介してなかったね。明弥、宵瀬こっちおいで》

すると、二羽は呼びかけに答えるように羽ばたき、藤乃の前に降りてきた。

《紹介するよ。こっちの右目が紅い方が明弥で、左目が碧いのが宵瀬》

なるほど、よく見ると二羽とも片目ずつ色が違う。しかし、何かに覆い隠されたような違和感を迦月は感じていた。

この二羽、呪をかけられている…？

《少し前に知り合ったんだけどね、けっこういい子らなのよ》

こいつらはただの烏じゃない…何かもっと違うものだ。

藤乃の表情や言い方からして、そのことに全く気付いてはいないらしい。

『迦月、これは…』

警戒を含んだ声で伐狐が迦月を呼んだ。

妖狐となる前は普通の狐だった伐狐も、二羽の烏の違和感には気付いていた。

しかし、迦月はそれを黙ったまま目で制した。

「藤乃さん、この二羽とはどこで知り合ったんですか？」

《一月くらい前に、散歩してたら古い祠を見つけてね。そこに、この二羽がいたから、話をしたんだ》

藤乃は生前から、動物の言葉を聞き取る能力があった。そのためか、死んだ今でも仲良くなった動物が気になって成仏しないのだという。

「祠？」

《そうなのよ。滅多に人が来ないような林の中にあったの。初めは、小さくて何なのか分からなかったけど、よく見てみたら祠だったってわけ》

それを聞いた迦月は、顎に手を当てて少し考える。

「…林の中の祠……祠かぁ…」

何かをブツブツと言っている迦月に《何かしたの？》と藤乃が首を傾げる。

伐狐はというと、これから迦月が言うであろうことを予想して、諦めたようにため息を漏らした。

「…ねぇ、藤乃さん。お願いがあるんだけど」

《ん？》

満面の笑みで言う迦月を見て、藤乃は嫌な予感がしたが、遅かった。

「その祠に連れてってくれない？」

二羽の烏

迦月と伐狐は、藤乃の案内で寺の裏にあるうっそうとした林の中に来ていた。

「藤乃さんって、この辺よく散歩するの？」

《そうだよ。墓場にいるだけじゃつまんないじゃない。あ、ほらあれだよ》

そう藤乃が指差した先を見ると、確かに小さな祠がポツンとあるのが見える。

「あれか」

迦月が祠へ近づこうとすると、後ろにいた伐狐が肩を掴んでそれを制した。

『だめだ。それ以上近づくな』

伐狐がそう言うときは、従った方が安全だというのを長年の経験から知っている迦月は足を止めたが、藤乃は伐狐の忠告を気にもとめず、ずかずかと祠の前へと歩いていく。

「藤乃さん！」

《？　なんともないじゃないの……うわっ！》

藤乃が祠に触れようとしたとき、木の上から二つの黒い影が飛び出して藤乃に襲いかかった。

「藤乃さん！！」

『チッ！』

舌打ちをしながら伐狐が身構えながら印を組み、藤乃の周りを半透明な球体で囲んだ。

それを確認した迦月が、ベルトの左側に付けた５０ｃｍはくらいの革製のケースから、素早く細い鎖で繋いだ三本の棒を引き出し、踏み込んだ勢いのまま三節槍の先端を影に向かって突き出す。

しかし、二つの影はそれをかわして、祠の後ろに立っている一本の大きな枯木の枝へと舞い上がった。

《…明弥？》

伐狐の作り出した球体の中で、驚きと困惑の表情を浮かべた藤乃が、上を見あげて小さく呟いた。

《宵瀬…？》

「！？」

『なんだと？』

迦月と伐狐が上に目を向けると、そこには右目が紅い烏と、左目が碧い烏がいた。

《明弥、宵瀬！どうしたの！》

何かの間違いだと必死で二羽の烏の名を呼ぶ藤乃。だが、明弥と宵瀬は藤乃に目もくれず、ただじっと迦月を見つめている。

『迦月、こいつらにかけられている呪を解けるか？』

《呪が…？》

いつの間にか、藤乃を囲んでいた半透明な球体は消えていた。

力が抜けたのか地面に座り込んでしまった藤乃が聞き返したが、二人は何も喋ろうとせず、二羽の烏を見つめ返す。

「出来なくはないけど、なんで…？」

二羽の烏にもう戦意がないことを確かめた迦月が、三節槍をしまいながら答えた。

『こいつらが、お前に話したいことがあるそうだ』

「私に？なら藤乃さんを通してでも…」

『直接言いたいらしいな』

見ると、珍しく伐狐が真面目な顔をしている。

伐狐がこんな顔をするのは久々だなと迦月は思いながら、ショックでいささか放心気味の藤乃に目を向けてた。

「伐狐、藤乃さんについててあげて」

そう言うと迦月は、コートの胸ポケットのボタンを外して、中から札のついたを取り出した。

『大丈夫か？』

「大丈夫、だと思う」

不安げに聞いてくる伐狐に、苦々しく笑ってみせた。

コートの裏から針を掌ほどの長さにしたような物を取り出し、細長く折った札をそれに結び付ける。

それを地面に突き刺して、先程からじっと迦月たちを見ていた二羽をを呼んだ。

「明弥、宵瀬。ちょっとここに降りて来てくれないか？」

針を挟んだ向こう側を指差し、迦月が言った。

二羽はその言葉に従って静かに滑降して降り立つ。

「準備はこれでよし。あとは私か…」

元もと、解術が苦手な迦月は、過去に何度も失敗した例があるため、ここ十数年は弘寛に任せきりで、自分で行うことがなかったのだ。

うーんと渋い顔で悩む迦月を見兼ねた伐狐は藤乃のそばを離れ、自分の髪を一本抜く。そして、その髪の毛を迦月に差し出した。

「伐狐…」

「使え。お前だけじゃ無理だろう」

「…わかった。ありがとう伐狐」

微笑みながら礼を言う迦月に、いささか照れ臭くて目を背ける。

「いいから、さっさとやれ」

伐狐は照れているのをごまかすように、憮然とした態度で髪の毛を迦月に持たせた。

伐狐が藤乃のそばへ戻ったのを確認すると、迦月は右の人指し指に伐狐の髪の毛を結び付け、意識を二羽と針に集中させる。

ゆっくりと息を吐きながら、右手の人指し指と中指を立て、口元へ

と持ってくる。

そして、静かに迦月が詠唱を始めた。

「≪
天高きは“空”
花咲きしは“大地”

その万物の理をねじ曲げられし　彼の者たちを
あるべき理へ戻し
真の姿を与え給え…　≫」
すると、針を中心とするように青く光る八卦紋様が浮かび上がる。

「この紋様の中に入って」
指示されたように、二羽は光る線の内側へ足を踏み入れる。
迦月はちゃんと二羽が中に入ったのを確認して、両手で印を組みながら、小さく祝詞のような言葉を呟く。
それにつられるようにして、八角形だった紋様が円になり、中にいた二羽を包み込むように球体へと変化していく。

印を組み、小さく祝詞に似た言葉を呟くという作業を繰り返していくと、二羽を包んだ球体が、それに合わせて形を変えていく。
そして、何度目かのとき、球体は人が入れる程の縦に長い楕円形になった。
そして、迦月がパンッと胸の前で手を合わせる。
それと同時に球体がいっせいに砕け散り、破片は風の中へ消えていった。
だが、そこに明弥と宵瀬の姿はない。

「……」

失敗か…うつ向き、立ち尽くす迦月。
そんな迦月を見て、伐狐が短く落胆の溜め息をつく。

《…明弥？宵瀬？》
伐狐のそばで座り込んでいた藤乃が、頭上を見上げて小さく発した言葉には驚きが含まれていた。
その声につられ、迦月と伐狐が上を見上げる。

はらり、はらり、と静かに落ちてくる二枚の黒い羽根。

『これは…』
徐々に視線を下げながら伐狐がつぶやく。
「はぁ～…」
力が抜けたのか、ぺたんとその場にしゃがみ込む迦月。
しかし、先程とは違ってほっとした表情を浮かべ、伐狐に微笑む。

三人の前には、黒い翼をもつ人影が二つ。

目を丸くさせている藤乃を横目に、迦月がその人影に笑いかけた。

「…おかえり」
『ありがとう迦月さん。…藤乃さん、ただいま』
そう言ったのは、背が高く山伏姿の若い男。
その右目は紅く、微笑みを浮かべていた。

『本当にありがとう。藤乃さん大丈夫？』
澄んだ声で心配そうに言ったのは、中国の宮廷衣裳のような姿で長い黒髪をさらりと吹く風に遊ばせている少女。
左目は碧く、大丈夫？と微笑んでいる。

二人の背中には美しい漆黒の翼がある。
《その声…明弥と宵瀬…なの？》
聞き覚えのある声と、その紅と碧の瞳を持つ二人に藤乃は戸惑いながら問い掛けると、男と少女は何も言わずにっこりと笑った。
《明弥！宵瀬！》
立ち上がり、二人に抱きつく藤乃。その目からは一筋の涙が溢れている。
二人はそんな藤乃を優しく抱き留めた。

「とりあえず、成功かな」
安堵の溜め息をついて、迦月は伐狐を見上げる。
『まぁ、迦月にしては珍しく成功だな』
伐狐が手を差し出し、迦月を立たせた。

『心配かけてごめんね、藤乃さん』
宵瀬が優しく藤乃をなだめる。
《…迦月が失敗すると…死んじゃうって、聞いてた、から…》
嗚咽交じりに藤乃が言った。
「えっ何それ！？失敗は多いけど、死なせたことはないから！！」
ちょっとショックを受けながら、迦月が藤乃の言葉を訂正する。
その横では伐狐が顔を反らし、肩を震わせながら笑いたいのを堪えていた。

「ちょ、伐狐！隠れて笑わないでよ！」
『ククッ…悪いな、つい』
笑いを堪えて苦笑しながら謝る伐狐に言い返そうと迦月が口を開いたとき、ふいに横から声をかけられた。
『お二人とも、少しよろしいでしょうか？』

二人が見ると、そばで山伏姿の男――明弥が戸惑い気味に笑っていた。

藤乃も落ち着き、祠から少し離れた場所へ移動した五人はそれぞれ石や倒木などに腰掛けた。

『で、何なんだ？』

最初に口を開いたのは、石の上に方膝を立てて座っている伐狐だった。

問われた明弥と宵瀬は少し気まずそうに顔を見合わせる。そして軽く頷き合い、迦月と伐狐に向かって頭を下げた。

『お願いします！どうか我らの主をお助けください！』

「！？」

依頼

『…お前たちの主を助ける？』
二人は頭を上げ、明弥が答えた。
『はい、お願い出来ないでしょうか…？』
懇願するように明弥が言った。
「その主って？」
『大天狗様です…』
宵瀬が返した答えに、迦月は古い記憶を引っ張り出すように目をつむり、腕を組む。
「大天狗…天笠岳（アマガサダケ）の？」
『そうです』
『私たちは大天狗様に仕えている烏天狗です』

天笠岳はここから一番近くにある山で、古くから霊峰として崇められてきた。そして、そこを住みかとしているのが、この二人の主である大天狗だ。

『あの大天狗か』
「なんか懐かしいね」
迦月と伐狐が苦笑しつつ言うのを見て、三人の頭に？マークが浮かぶ。
それに迦月が気付き
「あぁ、そうか」と笑った。
「私と伐狐は、天笠の大天狗に会ったことがあるんだよ」

《そうなの？あんた達って顔が広いわねぇ》
驚くこともなく藤乃が感心しながら言った。
その隣では、明弥と宵瀬が『えっ！？』と小さく驚きの声を上げた。

「そんなに驚かないでよ。まぁ、その頃はまだ二人はいなかったからね」
そう言って迦月は二人に笑いかけた。
『我らがいなかった頃？』
『私たちは大天狗様の宮に仕えてから、およそ三百年は経っているのですよ？』
『それに、結界を抜けて宮に来た人間は一度もいませんでしたし…』
冗談なのでは？といぶかし気に聞く二人に、迦月は何も言わずに苦笑する。
《まぁ、そう思うのも無理ないね。外見以上に年くってるし》
藤乃がくつくつと笑いながら言った。
再び？マークが浮かぶ明弥と宵瀬。
『伐狐さんは妖狐なのでそれも分かりますが…、迦月さんは人間ですよね？』
「一応は人間だよ。かなり異端だけど」
苦笑したままで迦月が答えると、さらに二人の頭に？マークが増えた。
その様子を藤乃がくつくつと笑い、伐狐は眠いのか欠伸を噛み殺しながら伺っている。

『こんなことを聞くのは失礼なのですが…』
明弥が少しオドオドと問い掛ける。
「ん？」と軽く首を傾げて、迦月は続きを促す。

『迦月さんは…今、いくつなんです？』
『！？ちょっ、明弥！それはさすがに失礼よ！！』
すかさず宵瀬が明弥を咎める。
『いゃ、その…直接聞いたほうが早いかと思って…』
『そういう問題じゃないでしょう！』

「べつに私は気にしてないよ」
『ですが…』
宵瀬の顔には『女性に年齢を聞くなど無礼です』とはっきり表れている。
それを見て、宵瀬は優しいなと迦月は笑った。
「いいんだよ私は。１０００年生きてれば、そういう感覚も無くなるから」

『……』
『……は？』
聞き違いか？今、有り得ない年数を耳にした気がする…
そう頭を巡らしている二人は、呆気にとられた表情で固まっている。

《おーい、二人とも戻ってこーい》
両手をメガホン代わりにして藤乃が呼びかけると、明弥と宵瀬は何度か瞬きをして、意識を現実に戻す。
『あ…すみません。聞き違いをしたようです』
『迦月さんが１０００年生きていると聞こえてしまって…』
ハハハッと恥ずかしそうに苦笑して謝る二人に、迦月は笑い返した。
「謝らなくても事実だから。まぁ、正確には１３５４年生きてるんだけどね」
『！？』
『１３５４年！？』
目を見開き驚く二人を、迦月はくつくつと笑いながら見ていた。

『あ、貴女は…いったい何者なのですか？』
困惑の表情を隠しきれない明弥は、身を乗り出して迦月に問う。

『お前ら、迦月が何者なのか知らずに頼んだのか？』
眠気のせいか怠そうに様子を見ていた伐狐が、咎めを含んだ口調で

言う。
『他の人よりも強い霊力を感じたので…。それに、藤乃さんには良くしてもらっていたので、これ以上迷惑は掛けられないと思いまして……』
すまなそうに視線を下げる明弥を見て、迦月はかわいそうに思えてきた。
「まぁ、いいじゃないか。伐狐もつっかかるのは止めなよ」
《そうよ伐狐！いじめないでよ》
藤乃は言いながら伐狐を睨めつける。
『…フン』
いかにも面倒というように鼻であしらう。頬杖を立て、伐狐はそのまま目を閉じると、数秒後には静かな寝息が聞こえてきた。「寝てるところを呼び出したからなぁ」
悪いことをしたなと寝ている伐狐をみて苦笑する。
そして、迦月は明弥と宵瀬に向き直って本題に入った。

「で、天笠の大天狗がどうしたんだ？」

『それが…』
二人は、事の顛末を話始めた。

「ふぅん。あの玄左衛門（ゲンザエモン）がそんなことに…」
迦月が主の名を口にすると、二人はぴくりと反応し顔を上げた。
『私たちにはどうしようも出来ないのです…。やはり、引き受けてはもらえませんか？』宵瀬が悲しげな目で迦月に訴え掛ける。
事の顛末はこうだ。

一月ほど前、宮を護る結界を破り、何者かが侵入した。
侵入者は四人。いずれも、天狗を模した黒い面を着けていたという。
宮に仕えていた烏天狗たちは侵入者の排除へと向かったが、侵入者たちは二手に分かれ、片方はその場に残って時間を稼ぎ、その間にもう片方は宮の奥へと進入して行った。
宮の奥には大天狗の寝所となる部屋がある。
中には主の大天狗と明弥と宵瀬を含んだ側近の烏天狗が十数名、侵入者に備え待機していた。
突然、部屋の中を風が吹き荒れ、思わず腕で頭を覆う。
気付くと侵入者と思わしき二人組が入口の前に立っていた。
突然のことに驚きながらも、側近たちはそれぞれ武器を手に侵入者を排除せんと飛びかかる。
しかし、その一瞬の後には烏天狗たちは床に倒れていた。
侵入者の一人が、大天狗に向けて手のひらを突き出し、何かを唱え出す。
残った明弥たちは大天狗を護るように立ちはだかる。
だが、侵入者は明弥たちに構う事なく、永唱によって作り出した力の塊を大天狗目掛けて飛ばす。
それを鳩尾にくらった大天狗はそのまま後ろに倒れ、苦しそうに呻きだした。
治癒術に秀でている宵瀬が術を発動させるが、治るどころか大天狗はさらに苦しそうに呻く。

その様子を見ていた侵入者たちが『この地はこいつで終わりだな』と意味の分からない話をしている。

明弥たちは侵入者に向かって術を使おうとするが、それよりも早く侵入者たちが術を発動させた。

部屋の中いっぱいに眩しい程の光が放たれ、側近の者全員がその場で気を失った。

そして、目が覚めたとき部屋にいた側近たちは、呪によって烏の姿にされていた。

倒れていた大天狗は、先程まで苦しそうにしていたのが嘘のように静かに眠っている。

外で侵入者と対峙し戻ってきた仲間によると、奥に侵入した二人は、残りの二人と合流し、結界から出て姿をくらましたらしい。

一方、大天狗の方は何度呼んでも起きる気配がない。かと言って、脈も正常で死んでいるわけではない。

何をしても起きない主に、側近頭の烏天狗は頭を抱えた。

そこで側近頭は、明弥と宵瀬を入れた数名の烏天狗に、誰か助っ人を呼んでくるように言い遣わしたのだ。

そして二人は、大天狗の羽根を奉っている祠で藤乃と出会い、今にいたっている。

「そうだねぇ…まぁ、いいかな。ヒマだし」

少しの間、腕を組んで考えていた迦月だが、その答えはあっさりとしていた。
『えっ！？よろしいのですか？』
断られるだろうと思っていた二人は、あっさりとした返事に驚く。
「いいよ。この頃何もなくて、ちょっと退屈してたんだ」
悪戯っぽく笑う迦月に、この人で大丈夫だろうか…と心の中で思う二人。

そんな二人のことはお構いなしに、迦月は立ち上がって伐狐を起こしにかかる。
「伐狐、悪いんだけど起きてくれないか？玄のとこに行きたいんだ」
『…ぅ…今からか…？』
まだ寝させろと伐狐は目で訴え掛けるも、迦月はそれを見て見ぬふりをしてにっこりと笑顔を向けた。
「うん。着いたら寝ていいから」
『……わかった』
伐狐は渋々ながら承諾する。
『お二方、有難うございます！』
「宵瀬、お礼はまだ早いよ」
伐狐が欠伸をしている横で、迦月が二人に笑いかけた。
『善は急げです。皆さん、宮へ行きましょう』
『そうね。では、迦月さんは私がお連れいたしますので、こちらへ』
宵瀬はこちらへ…と明弥との間に場所を空ける。
「私は伐狐がいるから大丈夫。じゃあ伐狐、よろしく」
『お前も妖使いが荒いな…』
そう愚痴を言いながらも、伐狐がくるりと宙返りをする。

『これが、伐狐さんの真の姿…』
とんっと軽く地面に着地したのは、眠そうな顔をした狩衣の男ではなく、虎ほどの大きさで七本の尾を持ち、銀に輝く毛並みが美しい

狐であった。

宵瀬たちは、その姿に思わず見とれてしまった。
《へぇ、いつもの伐狐からは想像出来ないほど綺麗ね》
からかいを含んだ口調で言いながら、藤乃はまじまじと伐狐を見つめる。
『余計なお世話だ。行くぞ迦月』
「はいはい」
気にするふうもなく言い放ち、迦月を乗せるために姿勢を低くする。
「よっと」
迦月は慣れた動作で伐狐の背に飛び乗った。
「それじゃ明弥、宵瀬。行こうか」
二人は頷き、飛び立つために翼を広げる。

《ちょっと待った！！あんた達、誰か忘れてるんじゃない！？》
皆が注目するなか、藤乃は両手を腰にあてて、不満そうに四人を見る。
「誰かって…藤乃さんも行くの？」
《当たり前じゃない！あたしが行かなくてどうするのよ》
ふん反り返って自信満々に答える藤乃を、迦月はやっぱりかと溜め息混じりに苦笑した。

『何があるか分からないのですよ！？藤乃さんはここに…』
《大丈夫よぉ！死んだ人間には何もないって》
藤乃に残るよう説得を試みるも、明弥が言い終えないうちに藤乃がそれを遮り、連れていけと笑いながら言った。
伐狐が一度、迦月を地面に降ろす。
『そいつに説得は無意味だぞ。融通が利かないからな』

伐狐が諦めろと、少しわざとらしく明弥に視線を向ける。
《何よそれ？あたしが偏屈ババアだとでも言いたいの！？》
『あぁ？どこか違がったか？』
まさに、売り言葉に買い言葉！とでも言うように口喧嘩が始まった。
脇ではこの口喧嘩をどう止めたらいいのかと、明弥たちがおろおろとしている。

「……はぁ～」
目の前の状況に、迦月が深い溜め息を落とす。
…この場合、やっぱり私が止めるしかないか。……なんか、イライラしてくるな…。
目をつむって腕を組む迦月の背後に、だんだんと怒りのオーラが漂い始める。

そのただならぬ空気を感じ取ったのだろう。明弥と宵瀬が同時にびくりと動きを止め、おそるおそる迦月の方を伺う。
しかし、それに気付かず騒ぎ続ける伐狐と藤乃。
《なによ！この寝ぼすけ狐！！》
『寝るののどこが悪い！お前こそさっさと成仏しろ！！』
どちらも一向に引こうとしない。むしろ激しくなる一方だ。

「伐狐…藤乃さん……」

静かな声に二人の口喧嘩がぴたりと止んだ。
周囲の温度が5℃は下がったと思わせるような空気を、ぴりぴりと全身で感じ取る伐狐と藤乃。
凍りついたようにうまく動かない首を、ギギギ…という効果音が似合う動作で、なんとかその声の人物へ向ける。

二人が見たのは、こちらへ向けて満面の笑みを浮かべる迦月。
しかし、その目は全く笑っていない。
「二人とも、以前にも言いませんでしたか？会う度に喧嘩するのはやめなさい、と…」
迦月の笑みで、さらに空気が冷たく凍りつく。

まずい…怒ってる……。

迦月を本気で怒らせると、ただでは済まない。
それをすでに経験している二人の頬を、つぅっといやな汗が流れる。

「お忘れですか？ふぅん…」
そう…と、尚も笑顔を向ける迦月。

まずい！最終警告だ！！
ここで謝らないと、殺されかねない！
二人は直感的にそう感じ取ると、次の瞬間にガバッと頭を下げた。
《ごめん！》
『頼む迦月！許してくれ！！』
必死で許しを請うが、迦月からの返事はない。

おそるおそる頭を上げる藤乃と伐狐。
見ると迦月が後ろを向いて、肩を小刻みに奮わせている。
『か、迦月さん…？』
宵瀬も、急に向きを変えて震え出した迦月に、どうしたのですか？と心配そうしている。

『迦げ……――ん？』
伐狐が声を掛けようとすると、迦月の震えがだんだんと大きくなっているのに気がついた。

……迦月のやつ、笑ってるのか！？
『おい、迦月』
「プッ…あははははっ！！」
とうとう堪えきれなくなって、迦月が腹を抱えて笑い出した。

《……へ？》
『あ、あの…迦月さん？』
腹を抱えて笑う迦月を見て、呆ける藤乃と天狗たち。

『おい…』
「あはは…だって、二人とも、必死で……プッ、あはは！」
笑いすぎて、息も切れ切れに喋る迦月に、こめかみに青筋を一つ立てた伐狐が低い声で聞く。
『……面白かったか？迦月』
「そ、そりゃあ、もう…ククッ」
どうやら、笑いすぎて止まらなくなったらしい。

《…ってことは、迦月。あんた、あたし達をからかってたわね！？》
ようやく事の真相に気付いた藤乃が、ペキパキッと指を鳴らして問い詰める。
「…ゼィ…ハァ、だって、藤乃さんがあんなに、必死だったから…つい、ね？」
やっと治まった笑いに胸を撫で下ろしながら、まぁ落ち着いて…と苦笑する。

そんな様子を見ていた伐狐が、小さく溜め息をつく。
『もういい。とっとと行くぞ』
迦月との付き合いが途方もなく長いため、これ以上何を言っても無駄だと、とうの昔に諦めているのだ。

《ちょっ…伐狐！いいの！？》
伐狐の意外な言葉に驚きの声を上げる藤乃。
それを一瞥し、
『半殺しになりたいなら、続けていればいいさ』
と答えて、伐狐は目を伏せた。
《うっ…あ、あはは…》
迦月によって半殺しにされている自分の姿が一瞬脳裏を過ぎり、引きつった笑いを浮かべる藤乃。

その横で、明弥と宵瀬がうまく状況を飲み込めずに、ぽかんとした表情のまま立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7901b/

今昔徒然顛末記

2010年10月14日14時52分発行